

特261

577

聽濤存稿

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特261
577



聽濤存稿





佛氣祥雲滿世界
海波老松如嶺南
儲之居士西松
歲可年 韋題海邊松 壽松居士

先考少きより漢籍に親しみ、屢々詩作をなし、又國書を読み、時に歌詠をなせり。然れども手記を存せずして、亡佚するもの多し。今遺作を拾録して、漢詩五十九篇、和歌三十七首を得たり。即ち印刷に附して聊か散逸に備へ、私かに記念の料となす。雅號として署せるところ、松濤齋主人、北海漁翁、劍峰散人、海望軒主人、聽濤居士等あり。晩年には法號を取りて、壽松軒又は徳元居士といへり。

昭和十三年十二月五日

岩城準太郎識す

聽濤存稿

漢詩篇

新年

明治七年

春到春猶淺

庭梅漸欲開

今朝風雪急

賀客冒寒來

同上

明治九年

春光微暖惠風吹

萬戶千門揭國旗

未問江南梅發否

拈毫先賦迎年詩

同上

同年

旭日移窓春已回
多情黃鳥園林裡

東風吹暖滿江隈
正報新年上早梅

梅雨

同年

雲烟連日雨
晚景啼鷓急

雨暗竹亭幽
園林鬱似秋

大雪即興

明治十一年

飛雪紛々何日晴
夜來溫酒禦寒氣

埋籬數尺使人驚
折竹聲如爆竹聲

同上

同年

六出花飛白玉臺
身如龜凍爐邊坐

北風凜冽少人來
愛護瓦盆一樹梅

同上

同年

寒氣侵膚酒力微
山中日夜幽窓下

雪花掩亂滿柴扉
漫閱詩書忘世機

梅雨

同年

茅檐連日雨如煙
散步渡頭初見霽

梅熟園林五月天
清風忽起綠蘋前

山中銷夏

同年

山中無暑色 一路鳥飛還
似聽雨聲起 風多松樹間

新年

大正五年

瑞氣橫天旭日新 賀賓來往祝佳辰
三杯淑酒三椀餅 今歲重迎寧樂春

同上

同年

兒著新衣迎此晨 淑酒三杯氣彌伸
東風送暖梅花發 笑語聲中自有春

御題遠山雪

同年

遠望連山雪 旭光相映鮮
四民皆喜色 知是表豐年

猿澤池

同年

春日逍遙猿澤池 垂楊無力被風吹
龜攀岩角交相息 鯉在波間聚又離

訪興福寺

同年

春暖催花尙覺寒 吟人日夕不嫌看
五層高塔聳雲表 則是南都一偉觀

梅雨

同年

霖雨濛々鬱不開
柳蔭深處鶻語催
他鄉無友來相問
讀破吟書幾百回

聞子規

同年

夜來雲散雨初晴
柳蔭螢火分外清
殘月入窓人已睡
斷腸杜宇兩三聲

苦熱

同年

炎暑消金石
午眠流汗珠
夜來無降雨
明日我奈吾

觀月

同年

野趣寥々不禁秋
他鄉無友憶前遊
仰觀三笠山頭月
照至妍々石瀨流

仲秋無月

同年

今夜中秋何處迎
無情雲蔽到深更
都人賞月皮相耳
不省陰晴頻酒傾

後觀月

同年

萬里晴空何渺茫
一行賓雁向南翔
風清月白明如晝
獨上高樓懷故鄉

歲晚

同年

塵事匆忙歲已窮
送迎新舊今宵中
何堪雪後寒威切
奔走逋索西又東

遊法隆寺

大正六年

汽機行盡認前邨
父子相携隆寺門
千歲未曾更舊態
幾多珍寶到今存

郡山觀櫻

同年

郡山城跡萬株櫻
遠近花開映眼鮮
傘影衣香斜照裏
醉歌狂態使人驚

蜃氣樓

同年

麗日無風暖暮春
得信馳到有磯濱
松陰乍變為樓閣
也化長橋蓑笠人

訪習靜堂

同年

三載重尋習靜堂
語新談往交情長
庭前依舊枝々暗
盛夏無風自覺涼

中秋無月

同年

淹留家國值中秋
連日雨風猶未收
屈指曾期今夜月
樽前因底遣閑愁

留別

同年

為客半載留故鄉
妻兒日夕促吾返

暑過寒至夜方長
節向深秋落葉黃

春日社參

同年

秋晴如洗望無涯
群鹿尾人頻乞食

松樹傲霜紅葉衰
幾團為隊賽神祠

冬夜讀書

同年

三冬閉戶獨閑居
夜々潛心繙舊史

啜茗擁爐常晏如
不知東寺曉鐘餘

大正七年 勅題海邊松

同年

瑞氣祥雲滿曉天
老松蟠屈如龍躍

晴波一碧旭光鮮
春雨秋風幾百年

元旦

大正七年

歲首相逢鶴髮人
黃鶯須出從幽谷

詩思拈筆養精神
流水青山總是春

興福寺畔

同年

和氣晴日獨徘徊
薄暮遊人猶未散

寺畔櫻花已滿開
停車處々說由來

途上所見

同年

嵐山艷賞地
此景人知否
吉野以花名
千松一樹櫻

大佛

同年

幾團男女滿堂庭
綠樹老鶯知佛意
縷々青煙氣自馨
暮朝頻唱法華經

夏夜聞杜鵑

同年

日中炎熱夜來修
杜宇一聲飛無影
夢覺五更心氣悠
唯看殘月懸松頭

訪居邨

同年

偶尋家國問村容
感慨夜深猶未睡
時勢變遷無舊蹤
曉天破夢瑞圓鐘

同上

同年

幼時遊戲此庭中
綠樹不知吾已老
回顧舊知多少空
今猶健在白鬚翁

手向山八幡宮

同年

卜晴欲賽八幡宮
恰好錦楓霜葉景
忽聽鹿鳴前路中
朝陽相對勝花紅

觀月

同年

一輪冰鏡影玲瓏
萬腔詩思轉難去

玉露金風遠近同
深更猶立月明中

仲秋

同年

誰當中秋第一魁
月如水鏡天如水

阪神遊客日中來
正到深更尙未回

秋懷

同年

青簾波動暑初銷
燈火可親吾未寐

四面蟲吟夜寥々
梧桐枝上雨蕭々

大正八年
勅題朝晴雪

同年

雪晴今曉五雲開
更上樓頭遙屬目

紅旭照來和氣催
遠山無限白皚々

己未元旦

大正八年

送臘迎新又一年
戰雲終熄平和日

回陽猶未起春烟
恭敬乾杯賀正筵

春日社途上

同年

數隊遊人競後先
老杉松柏連神殿

不論晴雨賽祠前
路畔燈籠幾百千

大佛

同年

傳言此像法身姿
幾隊遊人將賽去

今古名聲天下知
猶談佛果立多時

仲秋觀月

同年

薄暮陰晴未可知
萬人仰見今宵裏

清風乍起黑雲治
三笠山頭月出時

同上

同年

今夕天候疑惑中
高樓賞月團圓節

秋風一陣見晴空
遙思故鄉又可同

偶成

同年

人事非々不禁憂
茫然倚机頻催睡

嗚呼共老寂寥秋
身在和州夢故鄉

冬夜讀書

同年

新月移窓影自清
燈火可親初冬夜

乍聞茶鼎起笙聲
閱得吟書至五更

大正九年 勅題田家早梅

同年

花則好文天下魁
容姿恰似蛟龍躍

苦寒嘗盡發香來
咲亂田家老早梅

歲晚感懷

同年

光陰如矢歲將終
荆妻已為黃土客

煮茗喫煙一夜中
爐邊唯獨白鬚翁

庚申元旦

大正九年

寧樂迎年已五回
一陽來復春猶淺

家例團坐皆傾杯
未到東風屋外梅

偶成

同年

六十四年早已過
鵬聲夜々驚殘夢

回顧今昔感殊多
喚起愁思奈老何

詠高岡公園

同年

一國一城為廢城
春花秋月人來賞

規模宏豁自然成
北陸偉觀日々更

詠兼六公園

同年

兼六公園夙有名
依然三百年前跡

四時光景任人評
北鎮要衝金鐵城

秋日田家

同年

五雨十風秋暮天
金波壓倒案山子

村翁含笑佇田邊
今歲則知非凶年

展 墓 二十五年前國泰寺
展墓回顧

同 年

寂寞山村十月天

紅楓深處起雲煙

欲安先考精靈意

拜跪捧花墳墓前

大正十年 勅題社頭曉 同 年

早起洗顏意自伸

欲更衣袴賽明神

曉天舞樂嚴然貴

拜伏祠前幾十人

辭 世 同 年

耳順五載一夢中

殘年何惜白鬚翁

不迷三界黃泉旅

勿怪十方皆是空

聽 濤 存 稿

和歌篇

勅題晴天鶴

初春の朝日か、やく青空に御世を祝うてたづの鳴くなり

同

大内の晴れたる空に舞ふ鶴は豊かなる世のしるしなりけり

勅題松上鶴

九重の年ふる松にすむ鶴も千代に八千代に君をこそほぐ

勅題寒月照梅花

寒き夜の嵐につれて匂ふかな月に影さす圓窓の梅

勅題遠山雪

今朝見れば生駒の山に雪ふりて大空遠く嵐吹くなり

勅題海邊松

君が代を祝ふ舞子の濱松も年経ていよゝ緑そへけり

勅題朝晴雪

降りつゞく雪も晴れけり初春の治まる御代のあけぼのの空

同上

雪晴れて朝日照りそふ富士のねは霞の上にあらはれにけり

同上

豊かにも昇る屋ごこの朝烟都の空も雪晴れにけり

同上

今朝見れば雪晴れわたり古里の山も見ゆらむ心地こそすれ

同上

山里のかまごの煙たなびきて空晴れわたる雪の朝かな

同上

朝日さす大内山の雪晴れて千年の松に緑あらたし

同上

雪晴れて朝日照りそふしづが家の垣根の梅に花咲きそめぬ

勅題田家早梅

春風の吹くこもなしに匂ひ来る田伏の軒の早咲の梅

同上

早咲の梅をながめてしづの男も鋏をこゝむる御代の春かな

同上

賤が屋の垣根の梅も咲きそめて春待ちがほに匂ひぬるかな

雑

悟りなばかなしきもなく憂きもなし心をねりて行末を待て

同上

まゝならぬ憂き世をそれこ知らずして上をのみ見る人多かる

同上

朝に聞き夕に死ぬこも恨みなし道はしばしも離れざらなむ

同上

言ひ易く行ふことは難ければ道を説く人道をあやまる

同上

盡すべき誠の道を守りなばしげき人言も恥づることなし

同上

寒さをも凌ぎてこそは梅の花清き香もひろまりにけれ

★ ★ ★ ★ ★

大正六年高岡公園にて詠める

古城の池の水ぎはの杜若見わたす限り紫に咲く

同上

かはせみの飛び行くあごにささゆれし今を盛りの白蓮の花

大正七年初春

星移り耳順うてはや三歳物換りつゝ回る春かな

同上

六十ちあまり三歳もいつか夢の間に又新しき春を迎へぬ

同年片岡觀梅

のどかにも東風吹くたびに匂ふかな今を盛りの片岡の梅

同年佐保川を過る

春されば水もぬるみて佐保川の流れに浮ぶ桃の花びら

同年時鳥を聞く

ほごゝぎす一聲啼きて仰ぎ見る松の梢に有明の月

大正八年月瀬の梅を詠ず

見わたせば雪かこまがふ月が瀬の梅の花むら春風ぞ吹く

同年仲秋明月

指折りて待ちたる空の雲晴れて三笠の山にいづる月かな

同 上

まれに見る今宵の月のあざやかさ同じかるべし古里のそら

同年歳晚感懷

せまき家もたゞひろびろと思はるる妻なき跡のあした夕べに

大正九年仲秋

萩尾花みだるる野べに蟲鳴きて風吹きわたる秋の夜の月

同上

松影のかたむく野べにたゞひさり月見て思ふ故郷の空

同年自戒

何事も心をこめて一すぢにたゞつゆの間も道を忘るな

同年辭世

まゝならぬ憂世のさまを後に見て彌陀をたよりて行くぞうれしき

先考岩城平二、安政三年十二月二十八日、越中國射水郡中川村、加賀藩十村役南助松の三男として生る。明治八年三月富山縣上新川郡大村舊加賀藩十村役岩城準平の養子となり、同三女なをと結婚して分家をなす。明治二年より六年に至る間、富山藩士佐伯有種、同岡田信之、其他一二の師に就きて、漢書、國書並に英書を學び、又新たに設立せられたる凌雲學校に學び、七年之を卒業す。爾來學校教師として勤務し、二十年に至りて退く。其の間村治に従事し、十七年以來各方面に議員となり、二十二年町村制布かれて大廣田村の成立すると共に、選ばれて村會議員となり、又同助役に就任し、後又同村長となり、更に上新川郡郡會議員に當選し、其の副議長となる。明治三十七八年戰役に際し、大廣田村長として銃後軍務に盡瘁し、功を以て勳八等に叙せられ、白色桐葉章を賜はる。

392
131

後一切の公職を退きて風月を楽しみ、三十九年居を富山市に移し、四十三年金澤市に轉じ、大正四年奈良市に轉ず。同九年十二月五日、病を以て同市西包永町の寓居に永眠す。享年六十五歳。法號を壽松院泰譽徳元居士といふ。同十年七月郷里墳墓に葬る。

昭和十三年十二月第十九回忌辰

遺子 岩城準太郎記す

昭和十四年三月二十日印刷
昭和十四年三月三十日發行 (非賣品)
編者 岩城準太郎
奈良市法蓮町一三二五
印刷代行者 八田徳治郎
奈良市般若寺町二二
印刷所 八田印刷所
奈良市般若寺町二二

終

